
夜明けの空で、逢いましょう

ゾンビー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けの空で、逢いましょう

【Nコード】

N9197Z

【作者名】

ゾンビー

【あらすじ】

VRMMO『夜明けの空』純国産MMOにして、とある研究者が作ったVRシステムを利用して作られたそれに、主人公はどこか惹かれるようにして出会う。リアルにして虚構、虚構にしてリアルの世界で、どのような物語が織り出されるのだろうか？

1 welcome

初めて人を殺した時の感覚を、俺は覚えている。

それはとてもあっけないものだったと、俺は覚えている。

そして、それをやってしまった時のことを…その感覚を俺は覚えている。

ただ、ひたすらに楽しかったのを覚えている。

そして、その感覚にその感情は持つてはいけないものだ、知っている。

そんな俺はふとある雑誌で、それに出会う。

「VRMMO…『夜明けの空』？」

それは最近できた脳波を検出したりする技術を応用した人工現実感を使用した大規模オンラインゲームらしい。

「楽しそうだなあ。」

現実とは違い、命のやり取りが普通にある世界へと行くことができる。

それがどれほど魅力的かわからない俺ではない。

気づくと俺は、そのクローズド テストに申し込んでいた。

テスターに選ばれた俺は、VRへのダイブ用の機械を体にはめVRの世界へと入っていく。

「ようこそ夜明けの空へ。まずは職業を選んでください。」

職業一覧が現れる。

まだテスター段階なので、最初に情報公開されていた6つの職業のうち、剣士、魔術師、アーチャーの3つの職業しかない。

「とりあえず、アーチャーで。」

この中で、アーチャーは短刀での接近戦、魔法での補助、弓での遠距離と非常にバランスの良かったりする。

ただ、初期防御力が紙以下だが…

「性別はどうなされますか？」

「めんどいから、性別男で容姿も今のままでいいよ。」

何やら処理が行われているような間があき、今までなかったはずの全身が構築された。

「あー俺だわ。」

体の感覚から、何から何まで完全再現されていて、俺はテンションが上がっていく。

「では、夜明けの空をお楽しみください。」

放り出されたのは、どこか中世ヨーロッパを思わせる王都だった。汚物が窓から投げ捨てられる時代だよなあ… たしかこれグラウの発達率だったら…

そんな、どうでもいいかつ、汚いことを考えながら俺は弓を手取る。

初めて触った弓だが何故だか弓が馴染んでいる。

これが噂のシステムアシストか…

初期金額で、矢をありったけ買いフィールドへと出る。

「ん…初期スキルは射出Lv1だけか…補助魔法も短刀スキルもない。」

アーチャーはその万能性ゆえか、弓の攻撃力は低めに設定されている。

ちなみに、初期装備は弓、短刀、布の服だ

俺は初心者狩場の隅っこで、ちまちま弓を射る作業に入る。

フィールドの中央は混とんとしているしねえ〜

2ゲーム

弓を扱っていると、一日がアツという間に過ぎていき、MMOの恐ろしさを覚える。

なんとこのゲーム、システムアシストがなくても、攻撃ができることが判明した。

どうやら自分の攻撃+アシスト分の攻撃力が乗るらしく、アシストを切って攻撃してもある程度ダメージが通ったのだ。

今日俺は、街の酒場にいる。

「あの森を抜けた先が、新しい街だというのは解ったが…森のBOSSMOB倒さないといけないのか？」

「みたいですね？」

そして酒場でやることと言ったら一つだけで、次のマップへ行くための情報交換をしていた。

「廃人レベルの人間が突破できないのは何でだ？」

「いくらレベル上げしても、PSプレイヤースキルがないと突破できなくなっている

みたいですね。」

ふむふむ…

「アシスト、よける。アシストの繰り返しか？」

「いえ、それだったら被ダメがえぐいそうです。」

ん〜やっぱり、アシストなしの攻撃じゃないと倒せないのか…

「アシストなしの攻撃しかないのか…でも廃ゲームーならなんとかなんだろ？」

「いいえ、廃ゲームーはどうかやらアシストでの立ち回りが浸透しているみたいです。」

「なるほど、ありがとう攻略法が見えた気がする。」

俺は情報代のチップと、酒の代金を払い酒場から出る。

外の風は、軽く寒さを持っており、先ほどまであったまっていた俺の体を覚ましていく。

始まりの森の中に入り、俺はゆっくりと弓を構える。

夜はシステム上視界が悪く、誰も冒険に出ようとしなない。

その夜の暗闇に紛れ、俺は息を殺しながらアクティブモンスターの視界に映らないよう^{パーティー}に行動する。

通常は奥になるにつれてPTを組まないといけないのだが、こと俺に関しては、徹底してソロプレイ精神がしみ込んでいるのでこっちの方が楽なのだ。

俺はゆっくりとこの森のボスであるボスゴブリンへと近づいてゆく。

弓を引き絞り、システムアシストに身をゆだねる。

「はあああああ。」

飛んでいく矢じりがボスゴブリンの頭に刺さり、ボスゴブリンのつけていた兜が真つ二つに裂ける。

ちなみにボスゴブリンの特徴としては、180cmの灰色の肌を持って腰ミノと兜をつけている。

兜をつけている以外は、普通のゴブリン80cmを大きくしたような感じだ。

アクティブになったのか、スピードが乗った棍棒が横なぎで迫ってくる。

「マジかよ。」

俺は走りながら弓を絞り、狙いをつける。

こん棒の振るわれるスパンが、システムアシストの次回攻撃のスパンより早い。

「あの棍棒…速度品か!!!」

速度品とは攻撃速度を早くする能力を持った武器のことで、たまに移動速度が速くなるものもある。

「これはPSというか、リアルの技量があるなあ。」
弓を放ちながらのんきにつぶやく。

システムアシストが乗っていない矢の攻撃力はあまりなく、ボス

ゴブリンのHPを少し削るだけで終わる。

これは多少無茶したくなって、システムアシストのせたいなあ。しばらくして、ある程度削ったあたりから、こん棒の速度が上がっていく。

「おいおい、パッシブスキルでもあんのかよ。序盤のボスモブとしては強すぎじゃね？」

かすっただけで、HPが半分まで削られる。

俺は走りながらポーションを飲んだ。

走りながらでは完全回復までとはいかないが、そこそこ回復できるのだ。

「直撃喰らったら終わりじゃねえか…積みゲじゃねえか。」

ボスゴブリンのHPがあと数ドットとなったところで、俺はボスゴブリンの振り下ろした棍棒の衝撃で足がしびれこん棒の直撃をもるに喰らってしまう。

HPがギリギリになってしまい、回復アイテムももうない気づくと矢ももうなかったので、仕方なく短刀に持ち帰る。

「こいよ、ボスゴブリン！！」

ボスゴブリンの振りかぶる瞬間、その瞬間に俺は前へと進む。

ボスゴブリンに接近戦を仕掛けるためだ。

「くたばれ！！」

あと一撃でも喰らったりかすめば俺は終わる。

だったらひたすらに前へ出よう、ナイフがあたりバトル終了するのが先か、俺が負けるのが先か…面白くなってきたじゃないか。

1秒が数百倍…数千倍の時間をかけて流れていく感覚に支配される。

土煙が上がリ、いきなりその場が静かになった。

静寂が支配し、土煙がゆっくり晴れていく。

その場で俺はナイフを刺すような恰好をしたまま静止していた。

「…倒せただと…？」

手には命を切り裂いた感覚が嫌というほど残っている。

「はははははははははははは。」

まるで壊れたように……狂ったように笑う。

「共通クエスト始まりの物語をクリアしました。全マップが解放されます。」

全マップ解放とか……まさかあれがチュートリアルってことかよ。

ゲームバランス崩れてるってレベルじゃないだろう。

俺は次の街へと足を向けた。

2ゲーム(後書き)

序章は テストで必要最低限の人のかかわりしかしてません。

3 序章

「愚者達は動く、ただひたすらにやみの中を。」

「愚者達の声は、どこにも聞こえなくなり、悪役を演ずる道化を呼び起こす。」

「道化はつぶやく。」

「真実に至る道は一本ではない、ならいたる道の一本に立ちふさがって、それしか見えないようにしてやるう。」

「さらにその真実を隠すために、愚者達は動く。」

「だが実際に真実がこの世界にあつては、簡単に暴かれてしまう…ならば、虚構に隠してしまえばいいんじゃないかと。」

「さてはて、その虚構：道化が見たら爆笑するようなものだったと。」

「まさか、ヒーローを演じる道化の前に、ヒーローが現れるなんてね。」

「そうつぶやく道化の姿はどこか楽しそうに見える。」

「それを聞き、愚者達はさらにトラップを仕掛ける。」

「自分たちが隠した虚構の中から真実がばれないように、虚構へ至る道を隠してしまおうとした。」

「その結果はどうなるかはまだわからない。」

「ただその虚構には悪役がいて、悪がいて、正義がいるただそれだけのことなのだから…」

「明日の正式サービスのために、サービスを一時停止しているというわけだ。」

「残り組を加えて6千人は固いと言われてはいるが…」

「ふう」

「目を閉じると脳裏に焼き付いた、死の香りと悲鳴が俺の頭を刺激する。」

「ため息をつくその姿は、どこかさびしいものを感じた。」

英雄は苦悩する。

かつての自分に…かつての物語に。

愚者達は堕ちる新たな物語に、自分たちの物語に。

道化は笑う、悪役を演じながらこの先で起こることに期待を持ちながら…

『虚構は現実には、現実には虚構に堕ちてゆく。さあ夜明けの空で、逢いましょう』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9197z/>

夜明けの空で、逢いましょう

2011年12月31日01時48分発行